深江の青年団と夜学会

史料館館長　大国正美

大日霊女神社境内で撮影された一枚の写真がある。「深江青年夜学会創立紀念」という看板らしきものが見える。夜学会とは明治時代から各地で作られた青年団の自主的な学習会が発端だとされる。

明治時代は、家業重視や教育に対する理解度の低さなどがあって教育を受けられない若者が少なくなかった。このため江戸時代以来の若者仲間が土台になって、夜学会が自主的に運営され、農村部では、昼間の農作業の時間帯を避けて学習の場を設けた。また日清戦争（一八九四～九五年）、日露戦争（一九〇四～〇五年）では国内での「銃後の活動」が重視され、夜学会は行政により政策的に推進され、飛躍的に拡大した。民間の学習活動というより軍事教育や愛国教育に重きが置かれたという。明治末期から大正年間にかけて初等教育を補完する実業補習学校が普及すると、役割を終えていった。

深江での青年団については、大正十年（一九二一）発行の『武庫郡誌』によれば、長く中絶していた後、大正九年五月、深江駐在所巡査佐々見九一と篤志家岡部貞一郎が再興、深江在住の十五歳から三十五歳の男子を網羅、団員は四七〇人に及んだという。会長・副会長各一人、幹事三十四人を置いた。別に尋常科五年以上の小学校在校生を対象にした少年団もあった。毎夜夜学会を開き、精神修養と学科補習を行った。その数約七〇人で経費は篤志家の拠出により、熱心な指導が行われたとある。大正後半になっての盛会ぶりや行政からは独立した運営など、通常知られた夜学会とはかなり様相が異なっている。夜学会については『武庫郡誌』では武庫郡全体としては「甚だ盛んならず」とあるから深江での盛会ぶりが突出している。

その背景にあるのは岡部貞一郎という人物にあるだろう。岡部は明治二十三年（一八九〇）大阪に生まれ、大阪高等商業学校を卒業、大阪株式取引所などに勤務、深江に移住して青年団活動や村会議員などを経て、昭和六年（一九三一）には県会議員に当選した。

さてこの写真であるが、大正九年の青年団再興の時の写真と思いがちだがそうではない。後列左から三人目に写っている十代前半の少年は大正八年生まれの永田清治氏であるからである。年齢からすれば昭和一けたの写真だろう。写真に「深江青年夜学会創立紀念」とあるのは、何周年かの記念行事だろうか。七〇人という盛時の人数からみれば一九人と少なくなっているが、この時期まで継続していたことを示し、また神社境内に大きな松があったことなど、当時の景観がうかがえる貴重な写真である。

なお永田清治氏は昭和十五年軍隊に召集され、同十八年ニューギニア沖で戦死し、帰らぬ人となった。

昭和前期の深江青年団主催の夜学会（大日霊女神社境内）
＝永田清治氏の弟、勇雄氏提供